島村　礼子

I.　学歴

1968 年 3 月　津田塾大学学芸学部英文学科卒業

1970 年 3 月　東京教育大学文学研究科英文学専攻（英語学）修士課程修了

II.　職歴

1970 年 6 月　　東京教育大学文学部助手 （1973 年 3 月まで）

1973 年 4 月　　東北大学教養部専任講師 （1975 年 3 月まで）

1975 年 4 月　　津田塾大学学芸学部英文学科専任講師（1977 年 9 月まで）

1977 年 10 月　津田塾大学学芸学部英文学科助教授（1990 年 3 月まで）

1990 年 4 月　　津田塾大学学芸学部英文学科教授

2014 年 3 月　　津田塾大学定年退職

2014 年 4 月　　津田塾大学名誉教授（現在に至る）

III.　所属学会

日本英文学会，　日本英語学会，　日本言語学会

IV.　学会および社会における活動等

日本英文学会

編集委員　1997-2001 年，　評議委員　2003-2005 年，　監事　2004-2005 年，

編集委員顧問　2014 年 4 月（現在に至る）

日本英語学会　　大会準備委員　1990-1992 年，　編集委員　1994-1998 年

日本学術会議第 16 期・第 17 期　語学・文学研究連絡委員　　1997-2001 年

読売教育賞（読売新聞社）選考委員　　1999-2011 年

日本学術振興会科学研究費委員会専門委員　　2001, 2004, 2008 年

V.　著書

『英語の語形成とその生産性』リーベル出版，東京．　1990 年

［1991 年　財団法人語学教育研究所より　市河賞受賞］

『語と句と名付け機能―日英語の「形容詞＋名詞」形を中心に―』開拓社，東京．　2014 年

VI.　論文

1) 1983. “Backformation of English Compound Verbs,” *Papers from the Parasession on the Interplay of Phonology, Morphology, and Syntax*, ed. by J. F. Richardson et al., 271-282, Chicago Linguistic Society, University of Chicago, Chicago.

2) 1984. “Backformation of English Compound Verbs Revisited,” *The Tsuda Review*, no. 29, 79-108.

3) 1985.「複合語と派生語―漢語系複合動詞を中心に―」『津田塾大学紀要』第 17 号, 289-301.

4) 1985.「複合動詞の活用」『英語青年』第 131 巻 5 号 (8 月号), 241 (13).

5) 1986.「『句』の構造をもつ英語の複合語について」『津田塾大学紀要』第 18 号, 87-102.

6) 1986. “Lexicalization of Syntactic Phrases,” *English Linguistics* 3, 20-37.

7) 1987.「語彙化について」『津田塾大学紀要』第 19 号, 155-173.

8) 1988.「接尾辞-er とその生産性について」『津田塾大学紀要』第 20 号, 101-122.

9) 1989.「接尾辞-ness と-ity の生産性について」『津田塾大学紀要』第 21 号, 99-119 .

10) 1989.「行為名詞と項構造の受け継ぎ(1), (2)」『英語教育』第 38 巻 9 号 (11 月号), 76-80; 第 38 巻 10 号 (12 月号), 76-79.

11) 1991.「語のもつ名付けの機能」『英語青年』第 137 巻 2 号(5 月号), 83 (19).

12) 1991.「英語の複合動詞の非生産性と基本語順」『現代英語学の諸相―宇賀治正朋博士還暦記念論文集』, 千葉修司ほか(編), 527-537, 開拓社, 東京.

13) 1994. "On the Notion 'Head of a Word'," *Synchronic and Diachronic Approaches to Language: A Festschrift for Toshio Nakao on the Occasion of His Sixtieth Birthday,* ed. by Shuji Chiba et al., 287-306, Liber Press, Tokyo.

14) 1995.「Mental Lexicon における屈折と派生―デフォルト規則の存在をめぐって」『津田塾大学紀要』第 27 号, 45-69.

15) 1995.「単語の日英比較―心的辞書から見た派生語を中心に―」『日本語学』第 14 巻 5 号(5 月号), 72-80.

16) 1996.『Mental Lexicon における屈折と派生についての研究』平成 6-7 年度科学研究費補助金 (一般研究 C) 研究成果報告書 (課題番号 06610445), 108p.

17) 1997.「英語との比較を通して見た日本語の『名詞+名詞』複合語―その生産性をめぐって」平成 8 年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告(1)『先端的言語理論の構築とその多角的な実証(1-A)―ヒトの言語を組み立て演算する能力を語彙の意味概念から探る―』, 145-164 (研究代表者:井上和子, 神田外語大学).

18) 1997. "Rule versus Analogy in Derivational Morphology: The Case of Agent Noun Formation in Japanese and English," *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, ed. by Masatomo Ukaji et al., 112-129, Taishukan, Tokyo.

19) 1998.「『語』としての資格―women's college タイプの複合語の場合」平成 9 年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告(2)『先端的言語理論の構築とその多角的な実証(2-A)―ヒトの言語を組み立て演算する能力を語彙の意味概念から探る―』, 209-229 (研究代表者:井上和子, 神田外語大学).

20) 1998. "Rule versus Analogy in Derivational Morphology: The Case of Agent Nouns in Japanese and English," *Proceedings of the 16th International Congress of Linguists*, CD-ROM, ed. by Bernard Caron, Pergamon, Oxford.

21) 1999. "Lexicalization of Syntactic Phrases: The Case of Genitive Compounds like *Woman's Magazine*," 平成 10 年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告(3)『先端的言語理論の構築とその多角的な実証(3-A)―ヒトの言語を組み立て演算する能力を語彙の意味概念から探る―』, 277-300 (研究代表者:井上和子, 神田外語大学).

22) 2000.「『語』としての英語の属格複合名詞について」平成 11 年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告(4)『先端的言語理論の構築とその多角的な実証(4-A)―ヒトの言語を組み立て演算する能力を語彙の意味概念から探る―』, 341-361 (研究代表者:井上和子, 神田外語大学).

23) 2001. "The A-N Expression within the Compound and the Phrase/Word Distinction," 平成 12 年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告(5)『先端的言語理論の構築とその多角的な実証(5)―ヒトの言語を組み立て演算する能力を語彙の意味概念から探る―』, 163-175 (研究代表者:井上和子, 神田外語大学).

24) 2002.「第 7 章 語を作る仕組み:形態論 2」『言語研究入門―生成文法を学ぶ人のために』, 大津由紀雄・池内正幸・今西典子・水光雅則(編), 89-101, 研究社, 東京.

25) 2003.「句と語の境界―複合語内部の『形容詞-名詞』形の場合」『市川賞 36 年の軌跡』, 財団法人語学教育研究所(編), 40-51, 開拓社, 東京.

26) 2003. "On Lexicalized Phrases," *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, ed. by Shuji Chiba et al., 631-646, Kaitakusha, Tokyo.

27) 2003. “The Boundary between Word and Phrase: The Case of A-N Expressions within Compounds,” *Proceedings of CIL 17,* CD-ROM, ed. by E. Hajičová, A. Kotěšovcová and J. Mílrovský, Matfyzpress, Prague.

28) 2004. 『形態論における語彙化の概念についての研究』平成 13-14 年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書 (研究課題番号 13610591), 74p.

29) 2005. 「句の語彙化について―英語の名詞前位修飾表現を中心に―」『現代形態論の潮流』, 大石強・西原哲雄・豊島庸二(編), 55-73, くろしお出版, 東京.

30) 2006. 「1. 人文科学編, 1-3. 形態論」『言語科学の百科事典』, 鈴木良次(編集委員長), 畠山雄二(編集主幹), 岡ノ谷一夫ほか(編集委員), 47-68, 丸善, 東京.

31) 2006. 「動作主を表す-er 名詞について―事象-er 名詞と非事象-er 名詞の区別を中心に」『英語の語形成―通事的・共時的研究の現状と課題―』, 米倉綽(編著), 368-407, 英潮社, 東京.

32) 2007. “The Adjective-Noun Expression within the Word Revisited: The Boundary between Phrase and Word,” *Language and Beyond: A Festschrift for Hiroshi Yonekura on the Occasion of His 65th Birthday*, ed. by Mayumi Sawada, Larry Walker and Shizuya Tara, 367-395, Eichosha, Tokyo.

33) 2007. 『「語」とその形態的緊密性についての研究』平成 16-17 年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書 (課題番号 16520303), 65p.

34) 2009. 「英語の名詞化における複雑事象名詞と結果名詞について」『津田塾大学紀要』第 41 号, 97-134.

35) 2011. 「英語の動詞由来名詞を導く接尾辞について」『ことばの事実をみつめて:言語研究の理論と実証』, 佐藤響子・井川壽子・鈴木芳枝・古谷孝子・松谷明美・都田青子・守田美子(編), 79-89, 開拓社, 東京.

36) 2012. 「語の構造と名付けの機能の関係について―『形容詞＋名詞』形と『形容名詞(形容動詞)＋名詞』形の複合語の場合」『津田塾大学紀要』第 44 号, 37-67.

VII. 辞典等

1) 1982. “comparative construction”の項執筆, 『新英語学辞典』, 大塚高信・中島文雄(監修), 研究社, 東京.

2) 1989. 「名詞」の項のうち「人, 物, 職業, 学問を表す名詞語尾 「『ワープロ』『パソコン』」 執筆, 『話題源英語(上)』, 井上雍雄(編), 63, 東京法令出版, 東京.

3) 1999. 語尾が -C, -R で終わる親見出し 134 項目の校閲・加筆, 『プログレッシブ英語逆引き辞典』, 國廣哲彌・堀内克明(編), 小学館, 東京.

VIII. 新刊紹介・書評等

1) 1992. ことばの書架: 齋藤倫明著『現代日本語の語構成論的研究―語における形と意味』(『月刊言語』第 21 巻 8 号 (7 月号), 139)

2) 1994. 書評 R. Lieber: *Deconstructing Morphology*: *Word Formation in Syntactic Theory* (『英文学研究』第 70 巻 2 号, 276-283)

3) 2003. 新刊書架: 伊藤たかね編『文法理論: レキシコンと統語』(「シリーズ言語科学」1) (『英語青年』第 148 巻 11 号 (2 月号), 712-713 (52-53))

IX. 研究発表

1) 1983. “Backformation of English Compound Verbs,” the Parasession on the Interplay of Phonology, Morphology, and Syntax, Chicago Linguistic Society, University of Chicago, Chicago.

2) 1985. 「『語彙化』について」, 日本英語学会第3回大会.

3) 1988.「接辞と意味概念との関係についての一考察」，日本英語学会第 6 回大会.

4) 1992. ワークショップ「名詞化を中心に―形態・統語・意味の接点」企画・司会，日本英語学会第 10 回大会.

5) 1994.「Mental Lexicon における屈折と派生について」（シンポジューム「Mental Lexicon の理論をめざして」），日本英文学会第 66 回大会.

6) 1997. “Rule versus Analogy in Derivational Morphology: The Case of Agent Nouns in Japanese and English,” the 16th International Congress of Linguists, Paris.

7) 1998. “Lexicalization of Syntactic Phrases: The Case of Genitive Compounds like *Woman's Magazine*,” C0E International Workshop in Linguistics, Kanda University of International Studies, Makuhari, Chiba.

8) 2001. “The A-N Expression within the Compound and the Phrase/Word Distinction,” the 75th Annual Meeting of the Linguistic Society of America, Washington, D. C.

9) 2003. “The Boundary between Word and Phrase: The Case of A-N Expressions within Compounds,” the 17th International Congress of Linguists, Prague, the Czech Republic.

10) 2004.「句の語彙化について」(「形態論シンポジューム」)，名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻主催.

11) 2005.「現代英語における -er 名詞について―事象名詞と非事象名詞の区別を中心に―」（シンポジューム「英語の語形成―通事的・共時的研究の現状と課題」），日本英文学会第 77 回大会.

12) 2009. “Deverbal Nominals With and Without a Suffix in English,” the Conference on Universals and Typology in Word-Formation, Košice, the Slovak Republic.

X. その他

1) 1997.「『会議宮殿』での第 16 回国際言語学者会議」『学術の動向』第 2 巻 12 号(12 月号), 68-69.

2) 2005.「若手研究者への手紙: 理論から言語事実へ，言語事実から理論へ」『学術月報』第 58 巻 8 号(8 月号), 70.

（以上 2014 年 10 月現在）